

東方虚像録

紅魔館の下っ端

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ある所に嘘を付くのが得意な男がいた。

彼の周りの人々はその嘘の技術を恐れていた。

が、ある日、彼は遺書を書き残して自殺した。

だが、そんな彼の前に不思議な影が現れる――。

そして彼はその嘘の技術を持ったまま、化け物だらけの幻想郷へ招かれた。

目次

0話	プロローグ	1
1話目	殺陣 表裏	5
2話目	偽る程度の能力	15

0話 プロローグ

その男は『嘘』が得意だった。

どんな事があるうとも男は表情を崩さずに、笑いながら嘘をついてきた。

それこそ、男はまるで息を吸うように、平然と。

そして不気味な事に、その嘘を他人が疑う事は一切なかった。

嘘の神に魅入られた人間。

彼に騙された人々は、誰もが彼をそう評した。いや、そうでなければ説明がつかなかった。

男は楽しくなっていた。そして、更なる嘘を求めて進化していった。

その進化を続ける嘘の技術を人々は恐れたが、そのあまりの不気味さに、何もできなかった。

出来ることはただ一つ、疑う事だけだったが、男の言葉を疑えばそれが現実となり、男の言葉を信じればそれが嘘となる。

何をしても、どうしても、決して彼の言葉からは逃げられなかった。

しかしある日、彼は遺言を残して首を釣った。

人々は最初こそ喜んだ。悪しき鬼は去った、と。

だがその遺言を見た時、人々の表情は一変して硬くなった。

【俺は死ぬよ。

でも、これは一体、『嘘』か『信』か、どっちかな？

本当にその死体は俺かな？

『嘘は信に』『信は嘘に』。

鳥は一度地に落ち、濁流を登りて龍となる】

その要領を掴めない遺言を見て、人々は色々な仮説を建てた。

『男は死んでいない』

『男は地獄から蘇る』

『男は——』

どれもこれも、彼の死を悲しむものでは無かった。彼の死を、不気味がる言葉だった。

当然だろう。彼は本当に不気味で、狡猾な男だったのだから。

だが、その仮説の中に足りないものがもう一つあった。

『そもそも、この遺言を書いたのは男ではない』

『さあ、君の名前を聞かせてくれるかな？』

何もない、本当に何もない空間に声が響く。青い人型のシルエットが浮かび上がり、寝ている『彼』に優しく話しかける。

『騙す……それはとつても素晴らしいものだ。君の『ソレ』は、もはや能力と言つても過言ではないよ』

返事のない彼を見つめながら、シルエットは揺れる。

それは自分の教え子を見るような優しい目。

『でも、現世じゃこれ以上の進化ができない。だから君に片道切符をあげよう』

シルエットが空間に手をかざすと、そこに穴が開いた。禍々しい紫の穴が。

まるで異界と異界を結んでいるかのような不気味な穴の中は、毒々しい煙が息を巻いている。

『大丈夫、いきなり試練を与えるつもりはないよ。最初は簡単に生きて、時間をかけて鍛えるといい』

シルエットは彼に背を向けると、そのままゆっくりと歩き出した。

『【偽る程度の能力】……さて、蛇が出るか龍が出るか……それとも、それ以外の何かか』

そうやって、シルエットはその場から消え去った。
そして彼もまた、ゆっくりと消えていった。

1 話目 殺陣 表裏

「あー？どこだろうなあ、ここ」

肩まである白い髪、耳に付けてある黒いイヤホン、黒いシャツの上から微妙に長いコートを着て、黒い長ズボンを履いた男は、僅かに眉を潜めて呟いた。

嘘の代弁者、殺陣（たて）表裏（ひょうり）は、暑い光を浴びせ続けてくる太陽を煩わしそうに見た後、下を見る。

そこにはおかしな光景が広がっていた。

まず、自分が乗っているのは地面などでは無く、木で作られた屋根だった。

彼は屋根などに登った記憶は無い。それどころか、今日は外にすらも出ていなかった。

次に、下を歩く人の服装だった。

着物や全体的に薄い皮の服を身に纏うその服装は、まるで遥か昔の人を見ているかのようだ。とてもではないが、今の時代では仮装以外の目的で着る事は無い。

最後に……なんだあれは。

一人の女が炎を掌で弄びながら、暇そうにあくびをしながら歩いている。手品師……

ではなさそうだが、果たして何なのか。

とりあえず、この状況では何をする事も出来ない。と考えた表裏は一先ず下へ降りることにした。

「よっ、と」

屋根から降り立つ。

屋根から地面までの距離は対して無かったのか、耐えきれない程の衝撃はこなかった。ちよつとピリピリするだけだ。

表情にはそういったものは一切出さず、表裏は何事も無かったかのように辺りを見渡す。

やはりその目には同じ光景しか映らなかった。全体的に時代遅れのものしかない。

表裏は暫くキヨロキヨロと辺りを見渡し、完全に自分の知らない土地だという事を再確認した後、頭を抱えた。

「何なんだよココ……」

頭を抱える表裏へ、何事かと思つた人々の視線が集まる。

だが表裏にはそんな事を気にする余裕は無く、とにかく思考を回す。働かせる。

(なんだこれ、なんだこっ？どうなつてんだ……)

頭のキレる、とまではいかないが、それでも表裏は頭は良い方だ。大抵の問題は一人

で解決に導ける。

だが今回のこれは、その頭脳を持ってしても正解へは辿り着けそうになかった。

いくら考えても分からない。そう判断した表裏は一人静かにため息を吐き、改めて立ち上がった。

彼の頭脳は正解を導き出せなかつたまでも、道筋程度なら思い付いたようで、辺りを見渡すと同時に脳を回転させる。

まるで何かを吟味しているかのような鋭い目が、ある一人の女性の位置で停止した。

その女性は、表裏が屋根の上で見た時に、掌の上で炎を弄んでいた人だった。

彼女が表裏の目に止まった理由は無い。彼は最初に視界へ入った人間に狙いを定めただけのこと。

表裏は小走りで女性の元へ駆ける。

ただし、

「すみませーん、少し聞きたい事がー！」

声色を変え、女性のような高い声の状態で、だ。

彼は本当の自分を知られることを嫌う。それは、嘘を付いた時に、本当の自分が知られているとすぐにバレるから、である。

だから他人と話す際は、喋り方も、声色も、その気になれば性別だって偽る。

だが今回は性別を変える事は不可能。だからせめて、声色と喋り方だけでも変えて話しかけた。

「ん？なんだ？」

だが、その白髪ロングヘアーの女性は、その男には不釣り合いな声に対して何の疑問も持たなかった。

まるで当たり前と思っっているかのように、平然と。

彼は気付いていなかった。

声を高めに切り替えた瞬間、自分の姿が『変わった』事に。

気付かない彼は、いつも通り嘘の声で話しかける。

「いえ、すみませんが、場所を聞きたくて」

「場所……？」

「はい、ここは何県のどこなのかを」

白髪の女性は少し首を傾げて、上空に？マークを作った。

「何県？なんだそれ、聞いたことないけど……」

「え？」

一瞬、表裏は素の声を出してしまった。

彼はそれに素早く気づき、振り払うように首を左右に振ってから、改めて目の前の女

性を見た。

その時に目の前の女性は、片目を擦っていた。

目が合うと少し戸惑ったような表情を見せたが、すぐにキリツとした表情に戻り、目の前の女性も、改めて、といった様子で表裏を見た。

「すまない。それで、何だったわけ？」

「……ですから、ここが何県の何処なのか、を聞きたいんです」

うーんと唸りながら考える女性に対し、表裏は心の中でため息をついた。

ここは相当な田舎らしい。それこそ、自分の住んでいる場所が分からないレベルの馬鹿がいるくらいい。

とはいえ、彼は自分以上の知能を求めているわけでは無い。ただ、一般常識さえ通じてくれれば。

白髪の女性は一般的な知識すらも欠けているようだった為、表裏は呆れたのだ。

少しばかりの無言の後、白髪の女性は何かを思い出したかのように、俯きぎみだった顔を弾かれたように前へ向けた。

「あー！そういうえば、人間の世界ではそんなものがあるって慧音から聞いたことあるな！」

その言葉に表裏の眉が僅かに動いた。

目の前にいる白髪の女性が、まるで自分には関係ない、遠い国の事を思い出しているような雰囲気で呟いたからだ。

どういう事だろうか？

どんな田舎に住んでいようが、全く必要ない訳ではないと思うが。

「あー、という事はお前は『外来人』か。そりや場所を聞きたくもなるよな」

意味の分からない女性の言葉に、表裏は今度こそ首を傾げた。

が、すぐに結論を出す。

恐らくこの村では、他の場所から来た者の事をそう呼ぶのだろう、と。

「おっと、そういや自己紹介がまだだったな。私の名前は藤原 妹紅、宜しく」

「え？ ああ、はい。私の名前は殺陣 表裏です。宜しく……う」

場所を聞いただけで自己紹介なんかするものか？ と表裏は疑問を持ったが、都会と田

舎では考え方も違うのだろう、と表裏は自己解決して自己紹介した。

表裏の名前を聞いた女性・妹紅はうんと頷き、踵を返して表裏へ背を向けた。

「殺陣、お前は多分帰れない」

「……は？」

帰れない。

その言葉に表裏は反応した。

といつても、今度は素の声ではなく嘘の声で反応したわけだが、それはあまり重要じゃない。

帰れない。

その言葉が表裏の思考を早めた。

もし自分が外国にいようが、『帰れない』なんてことは無い。何処に自分がいようとも、決して帰れない訳ではない。

なのに、目の前の女性は言った。

帰れない、と

「説明が欲しいだろう？ だけどあいにく、私は説明するのが上手くない。だから人に説明するのが得意な奴の所に案内するよ」

そう言い、妹紅は歩き出した。

先程の言葉の意味が分からない表裏は、とりあえず着いていった。

—————

表裏が連れて来られたのは、村の中で一番でかい建物のある場所だった。小さい校庭のような場所もあり、まるで昔の学校、寺子屋のようだ。

妹紅は躊躇なしに建物の中へ入り、一番近くにあつた襖を開いた。

「ん？あれ？妹紅、どうかした？」

襖の奥にあったのは、小さな部屋。

畳六畳程度の部屋に置かれた小さな机の上で、何かしらの作業をしていたであろう女性性は、妹紅を見て首を傾げた。

彼女の周りではプリントが山積みになっており、手にペンを持っている所を見ると、先程まで作業をしていたようだ。

妹紅は作業を邪魔したにも関わらず、悪びれる様子も見せないまま中に入って腰を下ろす。

「ほら座れよ、多分長くなる」

妹紅に促されるままに表裏は座る。

座り方は何も考えず、胡座だ。

表裏が座ると、机の前に座る青いメッシュの入った銀髪の女性が、妹紅へ視線を送った。

「妹紅、この人は？」

「殺陣 表裏。外人人っぽい」

「外人人……」

銀髪の女性は自分で再度呟くと、表裏へ視線を向けてきた。

「外人人って……本当？」

「……できれば、外人人の意味を説明して下さいとありがたいのですが」

意味が分からなければ肯定も否定もできない。いくら表裏が知能に優れているとしても、聞いた事も無い言葉を0から分かる程ではない。

それを聞いた女性性は『そうだったな』と呟き、座り直した。

「まず外人人というのは、まあ分かりやすく言うのだな……神隠しって知ってるか？」

「はい、あの、人間がいきなり居なくなるって奴ですよね」

「ああ。それじゃあ、その『神隠し』にあった人間は何処に行くと思う？」

「どいっ？」

表裏は顎に手を当てて、考える。

神隠しは、名前通り神に隠されるという意味。ということは、それに近い言葉。

表裏は思い付いた言葉を放った。

「天国とか、その辺りですかね？」

その解答を聞いた女性性は首を横に振り、人差し指で地面を指差した。

「正解は、『ハハ』だ」

聞いた直後、彼・表裏の思考は止まった。

唐突に放たれたその言葉。

『神隠しをされた人間が来る場所』と問われ、正解が『ここ』。
女性を表裏の思考が再起動する前に、両腕を組んで、言う。
「ここ」『幻想郷』に迷い込んだ人間の事を、私達は呼ぶんだ」
『外来人ってな』

2 話目 偽る程度の能力

【老いる事も死ぬ事も無い程度の能力】

【歴史を食べる程度の能力】

二人は、能力という存在の事を教えてくれた。

能力とは、何らかの超常現象を引き起こしたり、自分の肉体を強化したりと、様々な事が出来る便利なものらしい。

最初は鼻で笑ったが、妹紅が目の前で首を切った後に再生したり、慧音が歴史を食べて物が消えたりと、あらゆるものを見せてもらい、信じないわけにもいかなかった。

慧音は『さて』と眩き、改めて表裏を見た。

「外来人、そして能力の話は終わったな。そして次は……」

そこまで言い、続きを言おうとした慧音を妹紅が手で制し、妹紅が向き直った。

「【外来人】【能力】の二つが揃っている人間について、だ」

その時、表裏は少し変な違和感を感じていた。

なぜそんな話をするのだろうか、と。

自分が外来人というものである事は分かった。だが、それと能力に何の接点も見られ

ない。

まるで、能力という力を持っている人間に対しての説明のような、そんな違和感がある。

妹紅は続ける。

「本来、外来人というのはすぐに帰してもらえ。博麗の巫女に頼めば、結界と結界をこじ開けて、いつでも帰れる」

「だけど、能力を持った外来人は話が別で、異質の力である能力が巫女の力を邪魔するそうだ」

「本来通れない結界を通る為に、相手に干渉して精密な力の流れを汲み取る必要があるみたいでな、そこに能力なんて異質が働いてしまえば、乱れるそうだ」

「……」

表裏は内心、僅かに苛つきながら話を聞いていた。

こんな話を自分にしてどうするのか。自分には関係の無い、能力を持った人間の話なんてどうでもいいから、必要な事だけ教えてくれ、と。

だが、表裏は『聞いている身』であるため、文句は言えずに黙っていた。

妹紅は表裏の心の声には気付かず、そのまま会話を続ける。

「能力を持たない外来人は帰れる。能力を持つ外来人は帰れない。つまりは、そういう

事だ」

どういう事だ、と表裏は頭の中で突っ込む。

だが、次の妹紅の言葉に、表裏の目は見開かれた。

「『能力を持つお前は幻想郷で住むしかない』って訳だな」

「……………はっ？」

その時、表裏は素の声を出した。

その瞬間、表裏の体がブレた。

まるでテレビの砂嵐のような灰色の何かが、彼の体全体を覆い隠すように出現する。

『能力を持つ人間が帰れないから、俺も帰れない？何を言ってるんだ？』

その声も、甲高いような、低いような、透き通るような、よく分からない表現不能の
声に変質していた。

その『異常』を見た妹紅は、やっぱな、と一言呟いて、鏡持った。

鏡を持って、それを表裏へ向ける。鏡に映ったものが見えるように。

鏡を見た表裏は数秒ほど無言だった。

表情は分からない。目を見開いているのか、それとも興味なさそうにしているのか、
哑然としているのか。

ただ、表裏は少しして、凹凸の無い言葉で、こう言った。

『なんだ……こりや……う?』

「能力、だ」

砂嵐のかかった頭が動く。

今の動作も、妹紅を見たのか、それとも現実逃避するために顔を逸らしたのか、分からない。

妹紅は言う。

「能力の詳細は分からない。でも、さっきまでお前の姿が見えていたことは確かだし、何か試してみたらどうだ?」

表裏は無言で、動かない。

だが、ほんの数秒ほど時間が経った時、変化が訪れた。

砂嵐が薄れ、中の人物が姿を現す。

砂嵐から現れたのは、銀髪の人間だった。

服装は質素な白く薄いTシャツ。

下半身にはネズミ色のジーパン。

目は大きく、瞳の色は薄い青。

胸部は僅かな膨らみを見せていて、腕や脚、肉体の殆どの部位に筋肉は無かった。

芯の細く、色の白い銀髪の『女性』が、そこにはいた。

「……こんな感じ、ですかね？」

鏡を見ながら、表裏は首を傾げた。

自分の姿を鏡でまじまじと見る表裏だったが、妹紅達は大きく驚いていなかった。

妹紅達は、表裏が演技で女のフリをしていた時に、ずっとこの姿の女性を見ていたからだ。

むしろ、妹紅達は『この姿が本当の表裏』で、何かしたから砂嵐で姿が隠された。と
考えていた。

妹紅は一息ついて、口を開く。

「……分かったか？お前は『能力持ち』だ」

「……俄かには信じられませんが、実際に見て、使ってしまったのでは、信じるしかありませんね」

「そうか……」

妹紅が話し終わり、次に慧音が前に出た。

その目は、興味深そうに表裏を見ていた。

「……お前みたいなのは、初めてだな」

「え？」

「能力を持った人間が来るのは今までで何人かいたが、大半は状況を把握できずに、勝手

に飛び出して妖怪に食い殺されていた」

その時、慧音の肩の力が緩んだように見えた。

恐らく慧音は、表裏も他と同じように飛び出すと思ったのかもしれない。

そしてそれを出来る限り止めるために、いつでも動けるようにしていた、と。

だが、表裏が妙に落ち着いていて、大丈夫だと判断した慧音は力を抜いた。

表裏は自分の身体のあらゆる箇所を確認すると、その目を慧音達に向けた。

「それで、私はこれからどうすれば？」

「その辺りは心配しなくてもいい。帰れない人間を見捨てるほど、私達はクズじゃない」

慧音はそう言うのと、隣の妹紅へ目配せをした。

それを受けた妹紅は頷き、スツと立ち上がった。

表裏の横を通り過ぎ、言う。

「ついて来い、ある場所に案内するから」

「あ、はい」

表裏は妹紅についていく為に立ち上がり、部屋を後にしようとした。

ふと、表裏は何か気付いたように足を止め、慧音に顔を向けた。

「そういえば慧音さん」

「なんだ？」

「貴女の演技、うまかったですよ」

「……………」

「最後の最後に手際が良すぎるのさえなければ、貴女のミスはなかったんですがね」
「そう言い残し、表裏は妹紅を追って廊下を走った。」

—————

表裏と妹紅は寺子屋を出て、村の中心から少し横にずれた位置に立つ建物の前に来た。

その建物は寂れているわけではないが、何処と無く誰も住んでなさそうだった。

大きさはそこまでではなく、一般的な家の一部屋程度しかないように見える。

「とりあえずここを使って生活してくれ」

「いいんですか？」

「どうせ何もないんだろ？ならとりあえずここに住んで、生きていくうちに住みたい場所があつたら移ればいいよ」

「……………ありがとうございます」

一言お礼を言い、表裏は家の扉を開けた。

グイイ、と音を立てながら開いた扉の奥には、何もない空間が広がっていた。が、埃が積もっている所を見て、長いこと使われていないらしい事だけは分かる。

「……結構長いこと使われてないみたいですね？」

「ああ、ちよつとな」

言葉を濁した妹紅を見て、表裏は悟った。

この家には、多分何かある。

そう思った表裏は家の中を見渡した。

蜘蛛の巣の張った天井、床の隅に積もった埃、見忘れがないよう、じつくりと。

「おっと、そろそろか。じゃあ私はもう行くよ。何か困った事があれば、慧音の方に行つてくれ」

「あ、はい。ありがとうございます、妹紅さん」

妹紅はゆつくりと歩いて、表裏の前から消えた。

それを見届けた表裏は家の中に完全に入り、ギシギシと音を立てながら部屋の中央まで歩き、口調を変える。

「改めて見てみると……ひでエな」

表裏の身体を砂嵐が隠す。

そして中からは、本来の表裏が姿を現した。

「灯りも無い、埃は多くて寝転がる事も出来ねエ」

更には塵取りや箒といった掃除用品もなく、表裏は深いため息をついた。

この家に住む為には、この埃を出来る限りなくさなければいけないのだが、それができない。

雨風を一時的に凌ぐ小屋のような扱いは出来るかもしれないが、逆に言えばそれ以上のことはできない。

メインに生活する場所としては、環境が劣悪すぎる。

能力の事も考えたが、表裏は自分の能力がそういうものでは無いと、勘で悟っていた。

(能力……多分俺の能力は、嘘をつこうと思うことで、効果を発揮するもの)

寺子屋で自分の能力を見た時。

表裏は、何故かは分からないが、嘘をつこうと思った。

それはほとんど無意識で、女だと偽ろうと思ったのだ。

そして、姿が変わった。

女だと言おうとしたら、本当に女へ姿を変えた。

恐らく、表裏は能力を無意識のうちに酷使していたのだろう。

それを改めて意識して使おうとした時、無意識の断片が表に表れて、結果的に能力を

酷使できた。

といつても、これは推測に過ぎず、確定ではない。

だが表裏は、この能力が掃除とかに使えるほど、万能でないことを悟っていた。

「はあ、めんどくせ」

表裏の身体を砂嵐が覆い、また姿を女性に変えて外へ出る。

あんな埃塗れの家にいれば、いずれ病気になるてしまふ。

一度外に出て外の空気を吸った表裏は、家の周りを見た。

掃除に使える物があるかもしれないと思った上での行動だったが、家の周りにはちよつとした雑草しかない。

表裏は空を見た。

そこには太陽があり、まだ暗くなる様子はない。

「……まだ時間はありますね」

表裏はキョロキョロと辺りを見渡し、一件の家に目をつけた。

表裏が目をつけた家の中から一人の爺さんが出て行き、それを一人の婆さんが見送る。

その二人の一部始終を見ていた表裏は、自分の姿を一瞥して、ニヤリといやらしい笑みを浮かべた。

「……テストでもしますか」

表裏の脳が、活発に動き出す。

—————

「あれ、爺さん。もう帰ってきたのかい？」

「おう、ちよつとな」

先程外に出て行った筈の爺さんが帰ってきて、不思議そうに首を傾げる婆さん。

しかし爺さんは婆さんに目もくれず、少し辺りを見渡して、何かを探していた。

不思議に思った婆さんが口を開く。

「何を探してるんだね？」

「筈だよ、筈」

「え？今から農作物の収穫じゃないのかい？筈なんて何に……」

「ちよつと不具合があつてな、とにかく筈が必要なんだが、はて、どこにやったかな？」

そう言いながら爺さんは家の中を歩き回り、倉庫らしき場所を覗いたりして探している。

その行動を見ながら、婆さんは苦笑しながら答えた。

「何をやってるんだ、もうぼけちゃったのかい？家の裏に掛けてあるだろう？」

「……んだよ、だったらわざわざ来る必要なかったな」

「ん？なんだい？」

「いや、何でもない」

一瞬、爺さんの身体が定まらなくなった。

婆さんは一度目をこする。

そして改めて目を凝らした婆さんの前には、誰もいなかった。

「……おや？」

取り残された婆さんは一人、啞然とした表情で椅子に座っていた。

—————

「だー……疲れた、精神的に疲れた……」

だが、これで表裏は自分の能力を把握することが出来た。

嘘をつけば自分を偽れる。

『偽る程度の能力』

表裏は笑っていた。

普段から人を騙し、嘘を信じ込ませてきた表裏に、うってつけの能力。気付けば、表裏は元の世界に帰りたいなんて思っていないかった。

表裏は、元の世界にそこまで執着していたわけではない。

能力を手に入れた今、むしろ帰る理由が消えた。

不気味な笑みを浮かべ、彼は箒を手にとった。

—————

「ぜえ、はあ……こ、こんなもん？」

表裏は疲れた表情で、すっかり綺麗になった床の上へ座り込んだ。

掃除を執行してから三十分。

ずつと動き、やつと埃から床の主導権を奪い返した表裏は、汗で張り付いた服を。パタパタ仰ぎながら、天井を見た。

そこには、まだ撤去していない蜘蛛の巣。

つまり、次は天井の支配権を取り戻さないといけないのだが、残念なことに背が小さ

くて届かない。

因みに、表裏は何故か女性の姿である。

その姿で薄い服を。パタパタさせる姿は、なんか無駄に色気の出てる。しかし本人は男のため、それにドキツとした人間は例外なくホモである事を主張しよう。

表裏はそのまま、あー、と呟き、両足を組んで床に寝転がった。

「めんどくさい」

そして数分後。

掃除の終わった家の中から、女の寝息が聞こえてきた。